

## 先輩のキャリアと現在の日本語教育の学びを繋ぐために —態度の涵養につながるイベントの実践報告—

### To Connect Seniors' Careers With Current Learning of Japanese Language Teaching: A Practical Report of the Event That Leads to Cultivation of Attitude

近藤行人

Yukihito KONDO

#### 1. はじめに

国際的な仕事への憧れがある、言葉を扱う仕事をしたい。このような理由から日本語を教えるという職業に関心を寄せる人も少なくない。ただし、多くの職業と同様に、日本語教師が実際にはどんな仕事をしているのかは明確ではない。義永他（2019）は、一般的な日本語教師のイメージが「ホワイトボードやカードを使いながら学習者に日本語の仕組みや使い方を教える」ことだとしたうえで、実際の業務ではその他に、授業実施のための準備や教職員との連絡調整、学生対応など、様々な業務があると指摘している。具体的な仕事のイメージを持つことは、今の自分にとって必要なことを見つけることにつながるだろう。日本語教員養成課程で学ぶ学生にとって、学生生活の中で何を学び、どのような能力を身につければよいのか、それを明確に意識するための機会が不足しているのではないかと考えられるのである。

このため、筆者を含む研究チームは「日本語教育人材に必要な資質・能力とは？：様々な現場で活躍する先輩の経験から」というイベントを企画し、実施した。このイベントでは、本学の日本語教員養成課程での学びを経験して社会で活躍する先輩の話聞く機会を作ることにした。このような、参加する学生にとって身近で目標となる存在を Murphey（1998）は、Near Peer Role

Model (以降、NPRM) と呼び、「社会的、専門的、年齢的に近く、何らかの理由で尊敬でき、素晴らしいと思える仲間」であるとしている。Murphey (1998) における NPRM は英語の教育実習生であったが、この NPRM は実際の教師よりも身近なお手本として機能し、学習者にポジティブな効果をもたらすことを報告しているのである。このイベントでも話題提供を依頼した本学の卒業生を NPRM として設定し、現在大学で学ぶ学生に対し、様々な背景の異なる現場での実践に関わる日本語教育人材から話を聞くことで彼らが将来所属する可能性のある共同体との接面を創出し、地域の日本語教室、海外、日本語学校、国際交流業務など日本語教育人材が活躍する可能性のある現場で働く人の声からそこで捉えられている資質・能力を考えることをねらった。このような身近な存在との話や交流から現在の学びでは何が必要であるのか、日本語教育人材に必要な資質・能力とは何かを考えてもらおうと期待したのである。

## 2. 日本語教育人材に求められる資質・能力における態度

日本語教育人材に求められる資質・能力について、『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）』が2018年に示され、2019年にはその改訂版が示された。これらの報告書では、各活動分野や役割、段階で求められる資質・能力を知識、技能、態度の3領域に整理し、リスト化している<sup>1</sup>。報告書には日本語教育人材に共通して求められる基本的な資質・能力として、(1) 日本語を正確に理解し的確に運用できる能力をもっていること、(2) 多様な言語・文化・社会的背景を持つ学習者と接するうえで、文化的多様性を理解し尊重する態度を持っていること、(3) コミュニケーションを通じてコミュニケーションを学ぶという日本語教育の特性を理解していること、が掲げられた。これについて酒井 (2020) は、「個の尊重や人と人との関わり方に関する言及がなされた (p.18)」と述べている。

また、義永 (2020) は、『『態度』という側面を知識や技能と同等な資質・能力とみなすことも、2018年報告の特徴といえる (p.25)』ことを指摘している。報告書中の態度の項目には【言語教育者としての態度】、【学習者に対す

る態度】、【文化多様性に対する態度】という下位分類が示されており、日本語教育人材が備えておくべき資質・能力としての態度について、教師、学習者、社会という視点が示されたといえる。

態度は、従来より重視されてきた知識・技能を支えるものとしても位置付けられる。人間は態度に基づく行動の選択を行うのであり、対象についてメリットやデメリットを比較検討し、それをもとに選択や決定を行うことができるのは、態度があるおかげである（工藤 2019）。文化庁委託事業で作成された研修プログラムの教材においても態度は、『「資質・能力」のすべての項目はこれを基盤とする（西原・萬浪 2019, p.15）」とされている。単に知識・技能を備えているだけではなく、これらの知識・技能を使いこなすための資質・能力を想定しているのである。

文化庁報告に「態度」が資質・能力に含まれる概念として明示されて以降、日本語教育人材に必要な資質・能力としての態度に関する報告が見られるようになってきた。

中井・宮崎（2019）は、ロールモデルとなる熟練教師のC氏にインタビュー調査を実施し、C氏によって語られた内容を養成課程の対象者が読み、議論するという実践を報告している。このような実践の結果、養成課程における対象者は、「社会とのつながり」「専門性を社会に生かす」「広く俯瞰的な視野の必要性」「移民・労働者・定住者の受け入れを共有」「様々な人の支援と日本語教育の必要性」「多様なニーズを基に研究・教育を行う」「市民日本語教師の養成」「人と人を繋げる」「日本語教師のおごりへの警鐘」といった視点への気づきを得たという。経験豊富な他者の視点を知り、日本語教育の社会性や実践とつながる知識を得るといふ態度への気づきを得たといえよう。

上田（2018）は、自身の指導した卒業論文の研究を分析し、指導した学生からは卒論だけではなく、履修科目外の交流会やボランティア活動から多文化理解に対する態度を育てていることを報告している。また、他者の人生経験を追求する研究等では、知識の側面よりも、研究を推進する力である態度の成長が強く関わっているのが認められるという。

これらの報告ではいずれも、態度を涵養するための第一歩として、他者の

経験からの気づきを得ることが示されている。日本語教育人材の資質・能力のうち、態度の涵養につなげるために、まず気づきを得ることをスタートとして設定できそうである。

そこで、本稿では現在の学びと将来所属する可能性のある共同体との接面を作るべく企画した「日本語教育人材に必要な資質・能力とは？：様々な現場で活躍する先輩の経験から」というイベントを、「態度の涵養につながるイベントである」としてその意義や学びを捉え直すことにした。このため、本稿では、イベントの実際を報告し、このイベントにおける参加者の学びや気づきとはどのようなものか、日本語教員養成に貢献できることとは何かを考えてみたい。

### 3. イベントの概要

イベントは2021年11月1日にオンラインのセミナー形式で行われた。参加者は41名で、すべて本学で学ぶ1～4年生の学部生であった。イベント当日は、表1のようなスケジュールで実施した。以降、それぞれの内容について述べていく。

#### 3.1 イベントの趣旨

冒頭でも述べたように、本イベントは、現在大学で学ぶ学生に対し、様々な背景の異なる現場での実践に関わる日本語教育人材から話を聞き、日本語

表1 イベントのタイムスケジュール

16:00	趣旨説明
16:05	話題提供①倉知礼花さん 海外（ベトナム）で日本語教師として働く
16:25	話題提供②森田真由香さん 国内の日本語学校で働く
16:45	話題提供③斎藤千佳さん 海外人材育成事業を実施する一般財団法人で働く
17:05	交流:ブレイクルームに分かれ、交流する
17:55	閉会

教育人材が活躍する可能性のある現場で働く人の声からそこで捉えられている資質・能力を考えることをねらった。日本語教育に関わる人材には、どのような資質や能力が必要なのか、現場での実際の声と大学での学びを結びつけ、卒業生で日本語教育関係の仕事に携わる参加者の先輩に話を聞き、現在の学びが将来の職業にどのように関連しているのかということを考える機会を作ったのである。また、日本語教育に関連するキャリア形成が一般的な就職活動とは異なっていること、背景のそれぞれ異なる3名の先輩の話聞きながら日本語教育に関する仕事に携わるためにはどんな資質や能力が必要なのかを一緒に考えてみてほしいということも参加者へ話した。

## 3.2 話題提供

次に、3名の先輩に登壇してもらい、話題提供をしてもらった。話題提供をお願いした3名はみな、本学の日本語教育プログラムを修了し、現在は実践の現場に身を置く卒業生である。話題提供を依頼するにあたって、様々な現場での経験を話してもらうことを目的に、異なる現場での実践に携わる3名に依頼をした。3名はそれぞれ、海外で日本語教師として働く倉知礼花さん、国内の日本語学校で日本語教師として働く森田真由香さん、外国人材に対する研修担当者として働く齊藤千佳さんである。<sup>3</sup>

3名の先輩には事前に1) 日本語教師（研修担当業務）とはどのような仕事か、2) それぞれの現場で「日本語教師（研修担当者）」として働く上で必要となる能力は何か、3) 本学で学んだことで現場に活きていることは何か、4) 今の「現場」にはこういう能力が必要で、そのために大学では（学生時代に）こういうことをもってしておく必要があったということ、5) 自身の就職活動、6) その他、という6点を含めて自由に話してほしいとメールおよび事前打ち合わせにて依頼している。

### 3.2.1 海外（ベトナム）で日本語教師として働く倉知礼花さんの話題提供

1人目の話題提供者である倉知さんは、2017年度に卒業し、現在、ベトナムのダナン工科大学で日本語教育に携わる日本語教師である。倉知さんは、

在学中に参加したハノイの日本語教育実習が縁となり、JICA 青年海外協力隊での派遣も含め、現在に至るまでベトナムにおける日本語教育に従事しており、この海外での日本語教育経験を背景とした話題の提供を得た。

倉知さんは自身の経験を振り返ったうえで、現在の仕事について、「学習者が目標を達成するためのサポートをする仕事」とであると述べた。この日本語教師に必要な力については、「人を観る力」「人を導く力」「ひたすら考える力・自分自身のことを振り返り、改善していく力」「日本語教育の知識・考え方」という4点を挙げた。

学生一人一人をサポートするための観察力やサポートのための関わり方、自身の成長に関わる力など、報告書に示された様々な資質・能力とオーバーラップする能力が語られたといえる。また、これ以外にも就職や日本語教師としてのキャリア形成に関わり、外部の研究会や講師会に参加してネットワークを構築していくといったような「人との関係性」に関する力の必要性についても言及された。

### 3.2.2 国内の日本語学校で働く森田真由香さんの話題提供

2人目の話題提供者は、2019年に卒業し、国内の日本語学校に勤務する森田真由香さんである。森田さんは在学中、韓国の釜山における日本語教育実習に参加し、日本語教育の主専攻と同時に中学・高等学校教諭一種免許状（国語）も取得し卒業後、現在に至るまで静岡県内の日本語学校にて専任講師として働いている。森田さんは日本語教師の仕事について、「最終目標のための手伝い」と話し、倉知さんの報告との共通点を語った。森田さんはまず、日本語教師の仕事内容として、「授業、出席管理、クラス管理、生活指導、テスト作成、カリキュラム作成、進学指導、学校行事の企画、ビザ申請、アルバイト管理、通帳の作成、市役所等登録手続き、病院付添etc」などを紹介し、日本語教師の仕事は授業をするだけではないこと、業務には学校外の人と連携を取らないとできない業務もあることを紹介した。

森田さんが考える現場で必要となる力については、「異文化間能力」と「クリティカルシンキング」を挙げた。前者については、日本語教師という仕事

では異なる文化の人びとと同じ時間を過ごすため、そこには当然異文化摩擦が生じる。このため、学生のことを理解、受容して初めて対応が可能になるというのである。後者については、日々の業務、先生とのコミュニケーションにおいても、考えることをやめないことが大事であると話した。そして、学生のうちにできることとして、国内・国外実習への積極的な参加や、自分でアポを取って行う学校見学などを挙げた。これは、とりわけ就職活動において日本語学校を1校1校周ったという森田さん自身の経験から自分から動いてみることの重要性が伝えられた。

### 3.2.3 海外人材育成事業を実施する一般財団法人で働く齊藤千佳さんの話題提供

3人目の話題提供者は、2020年に卒業し、現在は、主に開発途上国の産業人材を対象とした研修および専門家派遣等の技術協力を推進する人材育成機関で勤務する齊藤千佳さんである。彼女が関わる業務は日本語教師ではなく、研修担当者としての業務である。日本語教育の素養を持って関わっている現在の仕事や、そこで求められていることについて話題提供を得た。

まず、仕事内容については、研修生の生活のサポートをするのが主な業務であり、特に現在は日本の生活についての講義、研修生の受け入れ施設とのやり取り、研修生の住民登録や施設見学の引率といったことが主な業務であるという。また、当該機関における日本語授業の管理にも携わっており、日本語講師の採用、日本語授業の進行具合の調整、日本語授業の手配も行っているという。

このような業務に携わる力として、齊藤さんは研修生と話したり、通訳と話したりする際に必要なスキルとしてやさしい（シンプルな）日本語を話すことを挙げた。また、機関として異文化を受け入れる体制が必要であることから、研修生の様々な背景を知り、相談されることに対して、理解して受け入れることが必要であることが話された。

### 3.3 交流

話題提供後、ZOOMのブレイクルームを利用し、それぞれの話題提供者との交流を実施した。参加者を3つのグループに分け、少人数で自由に話題提供者と意見交換する場を設けた。参加者は思い思いの質問や考えを話題提供者に伝え、交流を行った。

### 4. イベント終了後のアンケート

イベント終了後、参加者には自由記述式のアンケートを実施した。アンケート調査実施についてはGOOGLE FORMを用いた。アンケートの質問は、次のとおりである。

アンケートの質問

- (1) 本イベントに参加を希望した理由
- (2) 今回の話を聞き、あなたが感じた「日本語教育に携わる人の資質・能力」とはどのようなものだと思いますか。できるだけ詳しく教えて下さい。
- (3) 今回の3人の先生がたのお話しは、これまでの日本語教育に関する就職について知っていたことと同じでしたか。違いましたか。初めて知ったことがあればできるだけ詳しく書いてください。(箇条書きでもかまいません)
- (4) 今回の話を聴き、あなたが日本語教師の就職について考えたことを教えて下さい。(もし日本語教師になりたいのなら、どのような現場で働きたいと思っているのでしょうか。そのためには何をすればいいのでしょうか。)
- (5) 今回の話を聴き、日本語教育を志そうと考えた時、あなたが今、学べる事、学びたいことはどんなことでしょうか。
- (6) 最後に、本イベントへ参加した感想を何でもいいのでお聞かせください。

#### 4.1 アンケートの回答

アンケートではまず、このアンケートの結果が、参加者からのフィードバックを検討するために実施するものであることを説明した。また、このアンケート調査により、いかなる不利益も被ることがないこと、研究会や調査報告として回答を利用することがあること、その際には個人が特定されない形で使用することを説明した。本章では、アンケート結果の利用について承諾を得た29の回答について報告する。

また、本報告においては実施した質問項目のうち、(2)「今回の話を聞き、あなたが感じた『日本語教育に携わる人の資質・能力』とはどのようなものだと思いますか。できるだけ詳しく教えてください。」と(5)「今回の話を聴き、日本語教育を志そうと考えた時、あなたが今、学べる事、学びたいことはどんなことでしょうか」という2つの質問に対する自由記述の回答について述べる。この2問は、本稿がテーマとする日本語教育人材の資質・能力に関わるためである。

#### 4.2 質問項目(2)の回答

本節では、質問(2)における「今回の話を聞き、あなたが感じた『日本語教育に携わる人の資質・能力』とはどのようなものだと思いますか。できるだけ詳しく教えてください。」という質問に対する自由回答について述べる。得られた自由記述の回答を整理した結果、(1)個々の学生理解、(2)サポート、(3)異文化理解、(4)考える力、という4つの特徴がみられた。

##### (1) 個々の学生理解

以下のような回答が「個々の学生理解」とされた回答である。

- ・個人をみること、その人個人を理解すること、考えるということを放棄しないことが必要だと思いました。言語の知識はもちろんですが、それよりも1人の人間としての対話することの重要性があるなと感じました。
- ・基礎的な日本語教育や日本語に関する知識を持っていることはもちろんだが、学習者のバックグラウンドを理解し、学習者の最終目標を達成す

るための手伝いができる人だと考える。

これらの回答は(2)(3)とも関連する項目であるが、倉知さんによる報告や森田さんの報告にあったような、学生を観察して、その背景も含めて理解する力を挙げていたといえる。これは「日本語教師【養成】に求められる資質・能力（文化庁 2018）」に挙げられた「学習者に対する態度」<sup>4</sup>として分類される内容と共通性を持つ記述である。

## (2) サポート

以下のような回答が「サポート」とされた回答である。

- ・単に日本語の知識を生徒さんに伝える能力だけでなく、深く考える力、一人一人に寄り添う力、生徒さんの将来の夢を実現させる力など
- ・サポートをする仕事が軸となっていると感じたため、相手の気持ちを汲み取る能力が必要だと思いました。

これらの回答は、学生の自己実現に寄与するための支援が教育であることへ気づき、サポートの必要性を挙げた回答であると考えられる。これは「日本語教師【養成】に求められる資質・能力（文化庁 2018）」に挙げられた記述で言えば、技能<sup>5</sup>に挙げられている内容と共通性を持ち、学生を支援するという文脈を帯びた回答である。

## (3) 異文化理解

以下のような回答が「異文化理解」とされた回答である。

- ・日本語を学んでいる方は日本語が母国<sup>マタコク</sup>でなく文化が違うので、そのことを理解し、受け入れることが大切だと感じました。
- ・三人の卒業生の方のお話に共通していたことは異文化への理解やそこに適応する能力が必要だということでした。日本語教育では異なる文化を持つ人と関わることばかりなので異文化間能力は必須だと感じました。

学習者が多様な背景を持つこと、そこには異文化接触が日常的に生じていることを知り、ここで必要な資質・能力として異文化理解を挙げていたといえる。これらの回答は、「日本語教師【養成】に求められる資質・能力（文化

庁 2018)」における「文化多様性・社会性に対する態度」<sup>4</sup>とされる内容と共通性を持つといえる。

#### (4) 考える力

以下のような回答が「考える力」とされた回答である。

- ・考えることを諦めずに何事も最後まで深く考える能力。
- ・学生をサポートするという意識を持ち、学生一人一人のバックグラウンドを知り、目標達成のために考え続けること。また、コミュニケーション力も大事になってくる。

倉知さんや森田さんの報告にあった「考え続ける力」や「クリティカルシンキング」を重要だと考えた回答だといえる。これらの回答は、「日本語教師【養成】に求められる資質・能力（文化庁 2018）」における「言語教師への態度」<sup>4</sup>に通じる内容である。教師としての成長を支える学び続ける力について述べている。

#### (5) まとめ

質問（2）の回答では、資質・能力とは何か、という抽象的な質問であったこともあろうが、言語教師への態度に含まれる、考える力や姿勢、学習者に対する態度、異文化理解に関する態度についての回答がみられた。個々の学習者をサポートするために必要なことに言及した回答もみられた。3名の話題提供で話されたことの中に出てきた様々な態度に関連する項目が参加者の印象に残り、このような回答につながったのではないだろうか。

### 4.3 質問項目2の回答

本節では、質問（5）における「今回の話を聴き、日本語教育を志そうと考えた時、あなたが今、学べる事、学びたいことはどんなことでしょうか。」への回答について述べる。この質問への回答についても、得られた自由記述の回答を整理した結果、(1) 日本語教師としての基礎知識に関する回答、(2) 教えること以外に関わる知識、(3) 異文化理解、他者理解に関わる知識、(4)

実践や現場を知りたいとする回答、(5) 学び続ける力や学びに対する姿勢(態度)に関する回答がみられた。

### (1) 基礎的な知識が必要だとする回答

以下のような回答がみられた。

- ・日本語教育能力試験を<sup>マ</sup>に向けて勉強すること
- ・あらゆることのベースとなる、日本語教育に関する細かい知識。
- ・日本語教授法をより深く学びたいと考える。さらに、日本語の基礎知識をもっとつけたいと思う。さらに、青年海外協力隊についても調べたい。
- ・今は、教授法や日本語教育が今までどのように進んできたのかについて学んでいるが、それらのことを積極的に学ぶのはもちろん、日本語教師として働くために何をしていく必要があるのか、私はまだ1年生だが、今から真剣に考えようと感じた。

日本語教育プログラムとして開講されている専門科目や日本語教育能力試験で扱われることについて学びたいという回答である。また、4つ目の回答のように、何を学べるのか考えようといった抽象的な内容の回答もみられた。

### (2) 教えること以外に関わる知識

以下のような回答がみられた。

- ・まずは、自分が日本のことをしっかり理解するべきだと思います。市役所手続きの仕組みとか日本に住んでいても知らない事がたくさんるので。
- ・やさしい日本語を使えるように学んでいきたいと思いました。

学習者をサポートするための行政手続きに関することや、学習者と対峙するために必要な技能としてのやさしい日本語に言及している回答である。学習者と対峙するために身につけておきたいことを回答している。

### (3) 異文化理解、他者理解に関わる知識

以下のような回答がみられた。

- ・日本語教育に関する知識はもちろん、それだけではなく、異文化理解や

日本語教育の現状についてより深く学びたいと思いました。

- ・日本語教育以外の分野も学んでみることを。(異文化理解・宗教など)
- ・世界の様々な宗教、文化、価値観、歴史、それに影響された現在の教育事情・コミュニケーションの中で、その人の考えを聞き出したり、相手の考えを知ろうとする姿勢・やさしい日本語とはどんなものか、どうやったら伝わりやすい表現になるのか

日本語を教えることが異文化との接触そのものであることであり、学習者理解のために様々な価値観や異文化コミュニケーションに関する知識が必要であるという回答である。

#### (4) 実践や現場を知りたいとする回答

以下のような回答がみられた。

- ・まずは、いろんな機関を探すこと、協力隊やAOSTなどといった幅広い視野を見ることをしようと思いました。
- ・大学生活のうちに日本語許<sup>マ</sup>い<sup>マ</sup>くボランティアや実習・日本語教育関連者とのつながりを作っておいた方が良いと感じた。
- ・理論だけでなく実践がしたいと思った。また、言葉に関する知識だけでなく、文化的な知識や社会人としての知識を身に着ける必要があると感じた。

これは、実践に関わることや、現場の実態を学びたい、実践に参加したいという回答である。日本語教育自体が実践に密接に関わる学問領域であることも関係しているだろうが、現場で活躍する先輩の活動や、先輩が現在の仕事に至る過程の経験を知ったことにより、実感をもって実践や現場を意識したといえるかもしれない。

#### (5) 学び続ける力や学びに対する姿勢（態度）

以下のような回答がみられた。

- ・学校での学びに対して、今まで以上に丁寧に取り組もうと思いました。何かを選択する際は楽ではないほうを選ぶことを大切にしていきたいです。

・学生同士だけでなく、教師にも必要になってくる、クリティカルシンキングをすることは今のうちから学ぶことが出来ると思う。授業でも自分の個人的な考え方だけでなく、誰か他の人の意見を聞き、参考にするようにしたい。教師は人を相手にする職業のため、自分とは違う意見を持った人とのコミュニケーションの機会を今のうちから大切にしたいと思う。また、今自分が受講しているすべての授業を大切に、基礎知識を固めていくことが出来ると思う。教師になってから、それらを一から始めるとなれば時間や労力がかかると思うので、教師になってからは、知識をアップデートするのに時間を取れるようにしたい。

これは、倉知さんや森田さんの報告で強調されていた話題でもある。質問(2)にもみられたが、学び続ける力や学びに対する姿勢が必要との話が心に残ったと考えられる。

#### (6) まとめ

学ぶという言葉に引っ張られたのか、基礎知識をきちんと得ることや他者理解のための異文化間能力に関する知識といった回答が多くみられた。また、行政手続きに関すること、ボランティアの参加など、実践で必要となるが、科目としての開講がないことを学びたいとする回答もみられた。先輩の仕事内容を知ることで、実践や現場を志向する回答が少なからず見られた。これらの回答をした参加者は、現在の学習がいつどこで活かされる知識なのか、技能なのかについて、考え始めた可能性がある。

### 5. イベントの総括と今後の課題

本実践において、大学で日本語教育を学ぶ学生は、先輩の話から授業以外の業務、将来のキャリア形成にとって必要な事項を意識した。日本語教育人材としての先輩から、現場の仕事内容とそこで求められる力についての話を聞くことで、参加者は現在の学びが活かされる現場の存在を実感したと考えられる。また、3名の話題提供には、文化庁報告(2018, 2019)で挙げられた態度に関する内容が盛り込まれ、学生の回答からもまた、必要な資質・能力

としての態度に気づきを得た可能性がみられた。ただし、このような気づきの機会は一度きりでなく、様々な機会を設ける必要がある。

また、今回のイベントによって学生が日本語教育人材に必要な態度にはどのようなものがあるのかについて知ったことはあくまでも態度の涵養につながる第一歩であることに留意しなければならない。態度とは本来、その状況に置かれた際、どのように考えるか、どのように行動するののかということと結びついているものでなくてはならない。今回の実践で得たような気づきを、考えや行動と結びつけた自分事としての態度の涵養につなげるためにどうするか、今後の重要な課題である。

また、本稿では、態度概念に関する内容の多くを文化庁（2018, 2019）に拠った。しかし、宇佐美（2022）は文化庁報告における態度概念については「精神的な構えにしか見えないものが多数含まれており、これらを研修でどのように扱いて得るのかが不明」であると指摘している。そして、文化庁報告におけるリストをそのまま利用するのではなく、「態度という概念を一様なものとして捉えるのではなく、明確な構造化を行ったうえでプログラムの中に落とし込む方略を考えるべきだ」とも述べている。今後、文化庁報告に挙げられた態度を見直しながら、日本語教育人材にとっての涵養すべき態度とはどのようなものかについて整理していくことも今後の課題である。

## 付記

本論文の執筆および、実施されたイベントはJSPS科研費21K18539の助成を受けている。

## 注

<sup>1</sup> 義永（2020）は、報告書を評価する一方で、具体的な教育方法の選択を各機関の裁量に委ねる姿勢が表れているのではないかとし、教育方法の具体例のなさが教育機関にある種の混乱をもたらす可能性や、資質・能力が役割・段階別にリスト化され、列挙された項目となっていることにより、要素主義的な資質・能力観や教育方法に陥ることについての懸念といった課題も指摘している。

<sup>2</sup> 本稿では、敬称としての「先生」は使用せず、「～さん」という呼び方で統一した。

- 3 話題提供者である倉知さん、森田さん、齋藤さんには、本稿における、話題提供についての該当箇所を示した上で本稿の目的及び内容を説明し、名前及び話題提供の内容を本論文に使用することについて、承諾を得た。
- 4 日本語教師【養成】に求められる資質・能力における態度には以下のような記述がされている。(p.24)
- 【言語教育者としての態度】(1) 日本語だけでなく多様な言語や文化に対して深い関心と鋭い言語感覚を持ち続けようとする。(2) 日本語そのものの知識だけでなく、歴史、文化、社会事象等、言語と切り離せない要素を合わせて理解し、教育実践に活かそうとする。(3) 日本語教育に関する専門性とその社会的意義についての自覚と情熱を有し、自身の実践を客観的に振り返り、常に学び続けようとする。
- 【学習者に対する態度】(4) 言語・文化の相互尊重を前提とし、学習者の背景や現状を理解しようとする。(5) 指導する立場であることや、多数派であることは、学習者にとって権威性を感じさせることを、常に自覚し、自身のものの見方を問い直そうとする。
- 【文化多様性・社会性に対する態度】(6) 異なる文化や価値観に対する興味関心と広い受容力・柔軟性を持ち、多様な関係者と連携・協力しようとする。(7) 日本社会・文化の伝統を大切にしつつ、学習者の言語・文化の多様性を尊重しようとする。
- 5 日本語教師【養成】に求められる資質・能力としての【技能】にある下位分類のうち、【教育実践のための技能】や【学習者の学ぶ力を促進する技能】に挙げられている記述内容との類似性がみられる。

## 参考文献

- 上田和子 (2018) 「日本語教育人材養成と成人学習理論－『日本語教育人材の・研修の在り方(報告)』を巡って－」 武庫川国文85, pp.27-39
- 宇佐美洋 (2019) 「日本語教育人材の「資質・能力」育成に関わる諸概念を再考する」言語・情報・テキスト：東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要 26, pp.13-26
- 宇佐美洋 (2022) 「育成可能性からみる『態度』概念の再整理－『日本語教育人材に必要な態度』をめぐって－」 日本語教育 181, pp.104-114
- 工藤恵理子 (2019) 「態度と態度変化」池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子『社会心理学 補訂版』有斐閣, pp.137-159
- 酒井彰 (2020) 「留学生に対するキャリアサポートと日本語教師に必要な資質・能力」基幹教育紀要, 6, pp.17-31
- 中井陽子・宮崎七湖 (2018) 「熟練した日本語教育者・研究者の語りからの学部生・大学院生の学びの分析－日本語教育人材に求められる資質・能力における「態度」の養成に着目して－」 大学日本語教員養成課程研究協議会論集17, pp.18-38
- 西山陽子・萬浪絵理編 (2020) 「CINGA 日本語学習支援者に対する研修カリキュラム開発事業教材」CINGA (Citizen's Network for Global Activities) (<https://www.cinga.or.jp/projects/2022.02.28>参照)
- 文化庁 (2018) 『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)』
- 文化庁 (2019) 『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改訂版』

義永未央子 (2020) 「日本語教師の資質・能力観の変遷と今日的課題」社会言語科学, 23(1), pp.21-36

義永美央子・島津百代・櫻井千穂編 (2019) 『ことばで社会をつなぐ仕事：日本語教育者のキャリアガイド』にほんごの凡人社

Murphey, T. (1998) Motivating students with near peer role models, Proceedings of the JALT 1997 International Conference on Language Teaching and learning, pp.201-206